第 37 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

課題部門　テーマ：人工知能と共存する
優良賞「あなたの言葉で人生が変わる⁉」
教育学部 児童教育学科１年１組　井場日向子

「ありがとう。」と人から発せられる言葉はなぜこんなにも心温まるのだろうか。人と人とがコミュニケーションを取る中で生まれるこのような気持ちははたして人工知能との間でも生まれるのだろうか。

答えはきっとノーだろう。

近年、人と人とがこのようなコミュニケーションを取る場は減ってきているように思える。人工知能の導入が増え、人間が行う代わりに人工知能が使われるようになったからだ。確かに、人工知能を使うことによって、人間の仕事の効率が良くなったり、ミスをすることがなくなったりとたくさんのメリットがあるだろう。だが、私は人工知能が増加し続けていくことで人間にとってメリット以上の多大なデメリットがもたらされてしまうのではないかと不安を覚えている。その一つが人と人とのコミュニケーションの場の減少だ。

現在、私は飲食店でアルバイトをしている。レジを任されることが多く、たくさんの人とコミュニケーションをとる機会がある。「ごちそうさまでした」と声をかけてくれたり、子どもたちから笑顔で「おいしかったよ。ありがとう！」とお礼を言ってもらえたりする。その言葉をもらえることで、一生懸命働いてよかったと思うことができ、忙しくても頑張ろうという気持ちが生まれる。言葉を投げかけた側は何気なく発した言葉であっても、言葉を受け取った側は元気づけられ、心温まるのだ。この経験のように人と人とのコミュニケーションでは、お互いが気持ちよくやり取りすることができる。だが、人工知能の場合はどうだろうか。まず、人工知能に対して「おいしかったよ」という言葉を投げかける人はいないだろう。私たち人間が言葉を投げかけたとしても、会話のキャッチボールをすることは人とのやり取りに比べて非常に困難であり、不可能に近い。そのため、人工知能との間では私が感じたような幸せな気持ちは生まれないだろう。

また、私が目指している保育・教育の現場でも同じような状況があると考える。現在、教育の現場では人工知能を利用する機会が増加している。子どもたちにタブレットが配られ、子どもたちはそれぞれで学習を進めていく。人工知能は子どもたちの成績を正確に分析し一人ひとりの習熟度に合った課題を提供することができるのだ。ならば、教師は必要がなくなってしまうのだろうか。

答えはノーだ。確かに人工知能は子どもたちの成績を伸ばしていくうえで重要なものだろう。だが、人工知能は子どもたちの人間性を育てていくうえでは適していない。子どもたち同士や、子どもと先生との間でコミュニケーションをとっていく中で、人間性は育ててい

くことができるからだ。子どもと先生とのコミュニケーションのやり取りで印象に残った出来事がある。私が中学二年生のころに保育園で職場体験を行った際のことだ。子ども同士がけんかをして泣いていた。そうすると保育士はすぐさま気づき子どもに対して、優しく語りかけ、お互いの言い分を聞いて子どもの気持ちを代弁し、仲直りさせていた。子どもたちの異変に気づき、素早く臨機応変に対応するようなことは人工知能にはできない。ましてや、子どもの気持ちを考えて言葉にするなどできるわけがないのである。そのため、子どもたちとコミュニケーションをとることができる教師や保育士は必要がなくなることはないのだ。また、保育士からもらった言葉で心に残っている言葉がある。それは「昔から保育園の先生になりたいって言ってたよね！」という言葉だ。保育園を卒園してから何年も経っているにもかかわらず、自分自身でも覚えていないようなことを覚えていてくれたことがとても嬉しく、感動を覚えた。先生にとっては何気ない言葉だったと思うが、私にとってはこの言葉こそが保育士になると決意した決め手の言葉であった。たとえ、私が「保育園の先生になりたい」と発したことを人工知能が記憶していたとしてもこのような感動を覚えることはないだろう。これは人と人とのやり取りだからこそ鮮明に覚えている、印象に残る出来事だったのではないかと思う。

このように、とても便利な人工知能に頼ることは時には良いことかもしれない。だが、人と人とのコミュニケーションの機会を減らしてまで、増やすべきものなのだろうか。お互いにコミュニケーションをとることで私たち人間は日々成長し、豊かな感情をもって生活しているのではないだろうか。現在の社会で人工知能と共存するうえでは、そのような人と人とのコミュニケーションの場を奪うことなく、言葉で繋がることのできる未来を守ることが重要であると思う。

「ありがとう」「よかったよ」などという人と人との間で生まれる言葉たちは、何気ない言葉であっても誰かの心を動かす力を持っている。心に残る言葉はいつも人間から発せられる言葉なのである。